

昼休憩が終わる十三時。新井が席に着くと、向かい合うデスクで携帯電話を操作していた能代のしよが歓声を上げた。

「お！ さっそくメール来た！」太い人差し指を懸命に動かし、「め・え・る・あ・り……」と声に出しながら入力を始めます。

「……お前、その癖直さないとおっさんだと思われるぞ」

「いいんだよ。別に恋人募集で登録したわけじゃないから」能代が手元から視線も外さずに答える。

「そうなのか」

能代がはまっているのは、ゲイ向けの出会い系アプリだ。かわいい恋人が欲しいと耳にタコができるほど言っていたから、てっきり「かわいいネコちゃん大募集☆」なんてプロフィールに書いてあるものだとばかり思っていた。

新井の冷めた視線に気付いた能代が口角を上げる。

「ゲイ向けアルバイト募集！ エッチでDMなネコちゃん連絡ください！」

「……って書いたのか」

新井の問いに、能代が満足げに顎を引く。

「一本釣り成功よ」

「アプリに書き込んだなら撒き餌だろ」

冷静にツツコミを返したが、能代は既にメールの返信に専念していた。配慮なくため息を吐き、新井も自身の携帯電話を取り出す。

かわいい恋人が欲しい——それは何も、能代に限ったことではない。新井ももう三十三歳。しかし最後に恋人がいたのは八年も前のことだ。仕事に夢中になりすぎて、ふられた。それに仕事がゲイ向け風俗であることも一因だった。

（俺も書き込んでみるか……）

しかし何をどう書き込んだらいいのかわからない。能代のようにメールを打つ度に声に出すようなことはしないが、おっさんであることには変わらないのだ。

（最近の若い子はどんな書き込みに反応するんだ……？）

新井が二十歳そここの頃はネットの掲示板で、恋愛目的、セックス目的と分かれていてわかりやすかった。しかしアプリが主流になってからは使い方がよくわからず、たまに覗いてみることはあっても自分が何かを書き込むようなことはしていなかった。

能代が握り拳を作って顔を上げた。

「よし、完璧！ お前も使ってみれば？」

優越感に浸ったような顔が憎らしい。

「俺は別にいいんだよ」

そう言いながら、書き込むには顔写真が必要になるなど考えていた。

(いい人いないかなあ……)

春太はベッドに寝転がり、携帯電話のアプリを開いた。

ゲイ向け出会い系アプリに登録したのが三日前、大学の夏休み初日の夜。今年の夏こそは彼氏が欲しいし、デートや……キスだっしてみたい。大好きな人とたくさんいちゃいちゃして、いやらしいことだっしてみたい。

しかし何度アプリを開いても、届いているメールは「俺のデカマラでメス落ちさせてあげる」とか「ちんぽがないといられない体にしてあげる」というような、いかにもセックス目的のものばかりだった。

(やっぱり僕のプロフィールがだめなのかな……)  
恥ずかしいので、顔写真に載せているのは顔の下半分を隠したものだ。それでも友達に「子どもみたい」と言われるくりっとした大きな目は映っているし、髪だっ生まれたときのまま染めたこともないので傷んではいないはずだ。立場はネコで、M。セックスはおろか恋人がいたこともない。その辺りは選択制だったので正直に答えて、自由記入欄には「はじめまして。大学三年生です。ペットみたいにかわいがってくれる年上の人が好みです」

と書き込んだ。

しかし本当の希望は「ペットみたい」ではなく「ペットとして」だし、他にも書きたいことはいろいろあった。裸で四つん這いで過ごして、ご飯や水分補給は相手の手でさせてほしい。おやつも時間には相手のペニスを舐めさせてほしいし、決まった時間になったら「勝手に繁殖しないように」と言っ出て出っっぱなしのペニスを、中が空っぽになるまで抜いてほしい。だから、セックスはたまにでいい。それよりも裸で抱き合う時間を重視してほしい――。

でもそこまで書けば誰からも求めてもらえないだろうと思っていた。だからほんの少しにしてみただけれど――。

（恋人が欲しいっていうのを前面に出さないとダメかなあ……）

いっそのこと、思いのすべてを書いてみようか。それでだめだったらまた書き直せばいいか――。

「新井、三番の子そろそろ上がり」

声を掛けてきたのは、施設長の沢口だった。

「はい」入力していたデータを保存する。

「悪いな。掃除担当、明日には復帰だから」沢口が顔の前で手刀を切った。

「もう体調よくなったんですか」

「胃腸炎だったらいい。昨日のうちに回復して今日は様子見だったから、もう大丈夫だ」

「それはよかったです」

パソコンをスリープにし、席を立つ。中から行くか一旦外に出るか、少し迷う。牛舎と事務棟は建物奥の廊下で繋がってはいるが、遠回りなのだ。今日は早く帰りたい。逡巡の後、新井は外に出た。一步踏み出した瞬間、十八時とは思えないほどの蒸し暑さに包まれた。

足早に通路を抜けて牛舎に入る。適度に効いたエアコン。自然の熱は感じなくなったものの、今度は男の発する独特な熱気に包まれた。むっとした精の匂い。一瞬息が詰まるが、一分もいればすぐに慣れる。

干し草を踏みながらまっすぐに伸びる通路を進み、三番と書かれた扉を開ける。ブースの中で、牛模様のカチューシャをつけた裸体の青年がぐった

りとした様子で横たわっていた。そばにはパートナーの男が腰を下ろし、頭を撫でている。

「お疲れ様」

「あ……」青年は朦朧としていた。

「牛さんに怪我は？」

「ないです」パートナーの男が答えた。

「よかった。次は明後日だね」

「はい」

二人が従業員用のドアから消えるのを見送り、床に敷かれた干し草をごみ袋にまとめる。軽くほうきで掃き、水分——精液や尿——が残っていないことを確認したら今日の新井の業務も終わりだった。

事務所に戻り、荷物をまとめて駐車場に向かう。アプリの通知が来ていないか気になったものの、ここで見ても落ち着かない。しかしすれ違う同僚に挨拶を返しながら、頭の中は午後休憩のときに見つけた「ハル」のことでいっぱいになっていた。

（返事は来てるだろうか……）

ペットとしてかわいがりたいというのを見て、自分のプロフィールも未記入のまま慌ててメールを送ってしまった。返信するかどうかを決めるのは相手で、決して早い者勝ちではないというのに、いてもたってもいられなかったのだ。

載せられていたハルの写真はとても小さかった。身バレ防止のためか画質も荒く、顔の上半分が映

っていることしか確認できないほどだったが、直感でかわいいと感じたのだ。それに、趣味もよく合った。もしハルがここで働いてくれたら——まだ返信が来ているかどうかもわからないというのに、メールを送った直後から、恋人になったらどう過ごすか、ということをまるで中学生のように妄想していた。

車に乗り込み、エンジンをつけるより先に携帯を開く。一件、アプリからの通知が入っていた。柄にもなく手が震える。高鳴る鼓動を鎮めるべく深呼吸をしてからアプリを開いた。

『はじめまして。ハルです。メールありがとうございます。いろいろお話ししてみたいです。よろしくお願いします』

思わず拳を握った。ひとまず第一段階はクリアだ。メールの文章から、おそらく数人にコピーで同様に返しているのだろうとは思うが、それでも時間を見ると新井が送ってから五分後に送信されていた。これはかなり早い反応だと言えるだろう。

(なんて返すべきか……)

こういうやりとりに慣れていないのか、それとも相手の積極性を見極めようとしているのか。ハルから話題を振ってこなかったことに少し頭を悩ませるが、逃がしたくない。

こんなに気分が高ぶったのは最後の恋人と付き合う直前が最後だった。ハルとはまだ会ったこと



もないし声だって聞いたことがないというのに、まるで恋。しかし夢を見ているときが一番楽しい。『返信ありがとう。今は夏休みだよ。何をして過ごしているのかな』

文面がおっさんくさいだろうか。しかし年上が好きだと書いてあった。あまり長文を送るとがつついていいると思われそうだったので、携帯を助手席に置いてエンジンをかけた。

マンションに着くと、携帯は通知を知らせるライトを点滅させていた。ハルだった。

『昼間は課題をして、あとは読書をしています』話題が広がらない。困った。質問を返してくればやりとりが続くの——しかし、もし他の男にも同じような文体で返信しているのなら、そこらにはつまらない相手だと思われるので連絡が途絶えていることだろう。だから、今がきつと粘りどころだ。

『俺も読書好きだよ。ミステリーが好きで、よく読むよ。ハルくんはどんな本が好き？』

少しだけアピールしてみた。読書が好きなのは本当なので、打算を含んでも罪悪感はない。

それが功を奏したのか少しずつ話題が膨らみ、寝るまでメッセージのやりとりが続いた。少しずつハルから質問もされるようになって、ペットプレイについても盛り上がった。

しかしハルが寝た後で頭を抱えた。明日も連絡

が来るかはまだわからないが、きっとそうなれば顔が見たいと言われるだろう。プロフィールはやりとりの合間にニックネームと年齢、仕事をしていることを記入したが、載せられるような自分の写真なんて持っていなかった。何枚か自撮りをしてみたが、写るのはただのくたびれたおっさんだった。

(昔はカッコいいと言われたんだけどな……)

大学の構内で連絡先を訊かれたことだっただけだ。卒業式には写真を撮ってほしいと何人もの女の子に――すべて過去の栄光だ。ハルは今の新井しか知りようがないというのに。

深夜一時、新井はライトや携帯の角度を変えながら妥協できる一枚が撮れるまで洗面台の前で粘った。

翌朝、起きてみると既にハルの方から「おはようございます」とメッセージが入っていた。勝手に口角が上がる。急いで返し、それから身支度を整える。

『今日はお仕事ですか』

『九時から十八時くらいかな。ハルくんは何をやるの？』

『昨日おすすめしてもらった本を借りに図書館に行ってきます。お仕事頑張ってください』

アルバイトはしていないのだろうか。それとも

そんなことを言えばバイト先に来られるかもと警戒しているのか……。家がそう遠くないことは昨日のやりとりでわかっていた。こういう出会い方だと、仲良くなった後に実は数百キロ離れていたとわかることもある。そのためのプロフィールだが、そこに書いてあることがいつでも正しいとは限らないので難しい。

ハルのことを考えながら職場に向かい、同僚や部下と挨拶を交わす。施設長はまだ来ていなかった。仕事が始まれば携帯をいじることはできないので、「またあとで」とメッセージを送ってパソコンを開いた。

しかし、どうにも頭からハルのことが離れない。こんなに仕事に集中できないなんて久しぶりだった。前にあったのは、恋人と別れたとき。仕事ばかりしてと言われたけれど、ちゃんと好きだったのでもそれなりに凹んだ。でも今は、それとは違う。楽しくて浮かれている。早く会ってみたいし、いやらしい話もしたい。でもできれば早めにこの仕事のことを話して、受け入れてもらってから仲を深めたい。

昨日知り合ったばかりだというのに、未来のことうばかりが頭の中を占めていた。

ハルとのメッセージのやりとりは、もう二週間も続いていた。朝の挨拶から始まり、行ってきま

す。昼休憩の間も当たり障りのないやりとりをして、仕事が終わったよ、から、ただいまを経ておやすみ。

しかし今日は電話をしたいとハルの方から言ってきたので、新井が夕食を済ませて体を落ち着ければメールは終わり。指定されたのが電話番号を明かさないう話アプリだったことは少し残念だったが、相手はまだ若い。それくらいの警戒心は持つておいた方がいいだろう。

『は、はじめまして……』

ハルは想像していたよりも数倍かわいい声をしていた。話し方も、少しおどおどした感じがピュアでいい。

「はじめまして。ハルくん」

『あ、あらい、さん』

「もしかして、アプリで知り合った人と電話するの初めて？」

言いながら、独占欲丸出しの自分に気付く。しかしハルはほっとしたような声を出した。

『はい。アプリに登録したのも先日で……こんなにやりとりをしたのもあらいさんだけです』

「ほんと？ 嬉しいな」

不慣れなふりをしているだけかもしれないと一瞬疑念を抱いたが、新井がメッセージを送ったときの返信の素早さを考えると、あながち嘘でもないように思えた。

『あの、お仕事お疲れ様でした』

「ありがとう。ハルくんは外に出たの？ 暑かったけど大丈夫だった？」

ハルは今日も図書館に行き、新井が勧めた本を借りたと言った。図書館の中で冒頭だけ読むつもりが手が止まらなくなっていることに気付き、涼しいうちに大急ぎで帰ってきたと。

自分が勧めたものを本当に手に取ってくれる。それがとても心地よかった。

「あーじゃあもしかして、読書の邪魔しちゃったかな」

違う、と言うのを聞きたいがための言葉だった。

『いえ。あ、読んでましたけど、今から電話だと思ってたら緊張して頭に入ってこなくなったので』

読書より電話の方が、と言ってほしかったが仕方ない。それでも緊張してくれたのなら好感触と思っただろう。

「想像と違った？ 声とか話し方とか」

『あ……はい。もっと怖い人かなって思ってたので』

「怖い人？ メール怖かった？」

『いえ！ そうじゃないんですけど……こういうの本当に初めてで。あ、本当に人間の男の人とやりとりしてたんだなって』

可笑しかった。新井が思わず笑うと、ハルも恥ずかしそうに「へへ」と笑う。

「そういえば、アルバイトとかはしてないの？」

『あ……したいんですけど、人見知りで……面接  
とかも緊張しちゃって』

「そうなんだ」

ということとは、親が金持ちなのか。新井が学生の頃はみんな必死にアルバイトをしていた。そうしないと、服を買ったり飲み会に行ったりするような余裕なんてなかったのだ。

『でも、新井さんみたいな人が働いているところ  
だったら働いてみたいなってちょっと思いました』  
「え？」

『優しいから。仕事、優しく教えてくれそうじゃないですか』

これはチャンスなのかもしれない。ハル自身もペットとしてかわいがりたいと言っていたし、アルバイトもしたいなら新井のパートナーとして牛になればいい。

（——って、なんて言うんだよ……）

言えるはずがない。まだ会ったこともないのだ。新井自身も、会ってみたらあまり好みの顔ではなかったと思うかもしれない。一時の高揚で、後自分を困らせるようなことはすべきではない。

ぐっとこらえ、誰に見せるわけでもない笑顔を作る。

「もしハルくんがうちの職場に来たら、ゼロから丁寧に教えるよ」

『ふふ。ありがとうございますーあの、どうい  
うお仕事をしたらっしゃるんですか？』

まさか本当にアルバイトを希望しているのだろ  
うか。そう考えてしまったせいで、反応が遅れた。  
ハルが焦ったような声を出す。

『あ……すみません、その、変な意味じゃなくて、  
雇ってほしいとかそんな図々しいことを考えたわ  
けじゃー』

「あ、いや。なんて説明しようかなって考えてた  
ところ。そのー」

もう、言ってしまうしかないか。単に仕事内容  
を告げるだけなら、むしろ言うチャンスだろう。  
少しためらうのは、仕事を理由にふられた経験が  
あるからだ。

「ゲイ向けの風俗なんだ」

『風俗……』

反応に嫌悪感はないように思えた。しかし考え  
る時間は与えない方がいい。

「そう。俺は事務なんだけど、職場は風俗。男の子  
がお客さんにエッチなことをされるところ」

『あ……』

戸惑いではなく、性感による吐息のように聞こ  
えた。つい早口になる。

「飼育員役のパートナーと牛舎に入ってー牛舎  
って言っても本物の牛はいないよ。ネコの男の子  
が牛役になって、お客さんに搾ってもらうんだ」

『しば……る……』

もう、何をどうされるのかはわかっているだろう。ハルの興奮が電話越しにも伝わってくる。

「そう。干し草が敷かれたブースの中で四つん這いになって、通路にお尻を向けて……お客さんがどの子のミルクを搾るか選ぶ」

ストレートな言葉は避けて伝える。その方がより想像力をかきたてられ、いやらしい気分になる。

『それ……で……？』

ハルの声に熱がこもった。その温度が伝染したように、新井のペニスが顔を持ち上げる。

「それだけだよ。ミルクを搾られるだけ。他には何もされない」

『え……』

風俗と言ったから、挿入があるとでも思ったのだろう。しかしそういうことはないと伝えてハドルを下げる。

「一日何回ミルクを出すかはパートナーと相談して決めるんだ。それで、それが終わったら仕事はおしまい。回数を多く設定しちゃうとつらいけど、なかなか出せなくてもパートナーが体に触れたり言葉でいやらしいことを言ったりして高めてくれる」

『あ……そんなお仕事……』

「うん。たぶん……ハルくんには向いてるかもしれないね。エッチだし、ペットーではないけど」



動物扱いだし」

もう止まらなかった。普段は仕事という意識が強いので牛舎に入っても興奮することなどないが、ハルがああブースの中で四つん這いになっているところを想像したら、見てみたくてたまらなかった。

「一度話だけでも聞いてみる？ パートナーになる人は俺じゃなくても相性を見て選べるし」

『あ……僕でも……できますか？』

極端に言えば、誰でもできる。あとはそれを愉しめるかどうかの違いだった。

くくく

「ありがとう。春太くんは単にペット扱いされたんじゃないかって、恋人にペットとしてかわいがられたいんだよね？」

「あ……はい。そうなんですけど……」

本当のペットに恋愛感情を持つ人はいないだろう。自分の中でも矛盾しているなと思っていたところだ。でも本当にペットとして扱われたい。でも恋人でもありたい。それが本心だった。

「じゃあ、仕事をするってなってもパートナーと恋人になりたいってことだよな？」

「あつ……!!」

そういうことになる。そう言ってしまったのと

同義だ。でも——新井はかっこいいし好みだけれど、さすがにまだ恋愛感情は抱いていない……はずだ。たぶん。でもこれから知っていけば、きっと好きになる。

「でもさ、恋人になってから、実はプレイの趣味が少しずれてたってことになったら嫌じゃない？」

「え……あ、はい……たぶん……」

そんなこと、考えたこともなかった。想像の中で、相手はいつだって春太好みのプレイをしてくれている。それは新井だって同じだった。

「例えば俺は……お手ができなかつたらしつけるけど」

「え……？」

話し方が優しいままだったので、しつけという言葉が異質に聞こえた。

「感情的に怒ることはしないけど、悪いことをしたら叱るし、トイレだってしつける」

「トイレ……？」

「ん？ ペットなのに人間と同じトイレを使うつもりでいた？」

「あ……」

そんなこと、考えたこともなかった。でも言われてみれば新井の言うとおりで。自分に都合のいいところだけペットとして扱ってほしいなんておかしい。

「餌は餌皿から。ああ、でも春太くんは手で食べ

させてほしかったんだよね」

「あ……や、でもそれはおやつだけでも……」

「おやつはペニスじゃなかった？」

「っ……」

そうだ、そう書いた。おやつ時間はご主人様のおちんちんを舐めたいと。

「春太くんはまだ生まれたての子犬だね」新井がふわりと笑う。「人間との生活を知らないから、よくわかっていないだけだよ」

「あ……」

胸が震えた。今すぐ新井をご主人様と呼びたくなった。でも、まだ今日初めて会ったばかりだ。新井のことを何も知らない。ただ春太が求めるものをくれそうな気がする、というだけ。

「少しだけ、体験してみる？」

「え……」

「あ、でも今日は仕事の話ってことだったから……  
…搾られてみる？」

甘美に聞こえてしまったのは、恋が始まる予感がしていたせいかもしれない。

「あ……恥ずかしっ……」

逃げたい。消えたい。

「かわいいよ。モォーって鳴いてごらん」

お風呂で体を手で洗われ——さすがに腸内洗浄はされなかったけれど——ベッドの上で四つん這

いになって尻を新井に向けている。ペットプレイを想像しているときは裸で平気だったし、そうさせてほしいとプロフィールにも書いていたけれど、まさかこんなに恥ずかしいなんて思っていなかった。

「も、モオー……」

「うん、かわいい。わんこもいいけど、春太くんは牛さんもよく似合うよ」

「あ……」

恥ずかしい。なのにペニスは悦びに姿を変えてしまっていた。

「さあ、ミルクを搾ろうね」

ホテルへの配慮なのか、部屋にあるグラスは使われなかった。そのかわり、亀頭の先には新井のハンカチが添えられている。

「牛さんだから、我慢は必要ないよ。どんなに早くても恥ずかしいなんてことはないから、身を任せてミルクを出してごらん」

「あっ……はあっ」

ペニスを握られ、快感に目を閉じる。すごい。他人の手だと、握られるだけでこんなに気持ちがいいものなのか。

「ああ、もうぐしょぐしょだね。少し張ってるのかな。ミルクを出すのは久しぶり？」

「っ……」

昨日も、一昨日も抜いた。新井にこうしてペニ

スを扱いてもらうのを想像して。

「ああ、牛さんに言葉は通じないね。さあミルクを出してごらん。溜めすぎると体によくないからね」

ちゅこちゅこと水音を立てながらペニスを取かれ、快感に喘ぐ。

「ああっ！ アッ、あつ、ああっ」

くくく

牛舎の正面に立つと、春太は頬を染めた。明らかに昨日のビデオを思い出している。

「おちんちん、起っちゃっても大丈夫だからね」

周りに人はいないが、わざと耳元でささやくと春太はすぐに股間を手で押さえた。

「っ……」

なんてわかりやすい子だろうか。少し、年よりも幼いようだ。

「まだ中に入ってもないのに想像だけで起っちゃった？」

「っ……あ、ごしゅ……新井、さん……」

ここは新井の職場。オンオフを切り替えなくてはと思ったのだろう。いじらしい。春太の頭に手をのせる。

「いい子だね。でもご主人様で構わないよ」

「いいんですか」

頷くと、春太は満面の笑みを見せた。今すぐ襲いたい欲を懸命に堪える。

「さあ中に入るう。エッチな匂いがきついけど、すぐに慣れるから」

今出勤している子は五人。平日の昼間なので少ないが、夜になれば十三人に増える。それにこの時間は予約が入っていないので客はいない。だから案内をするのに都合がよかった。

中に入ると、それでも濃厚な精液の匂いがした。隣から嬌声とも取れるため息が聞こえる。

「あ……はあ……」

「エッチな気分になっちゃったね」

「だって……」

春太の手が新井のスーツの裾を握った。まるで迷子に怯える子どもみたい。肩を抱き、ぐるりと一周牛舎内を回る。

「春太もこれから、ここでミルク搾りをしてもらうんだよ」

今日は見学だけだったがあえて入職する前提のように言ってみると、春太は恍惚とした表情で頷いた。しかし新井が見ていることに気が付くと、逃げるように横を向く。

「春太」

赤く染まった頬を撫でたくなった。手を伸ばさうとしたとき、春太が不思議そうな顔で首を傾げ

た。視線を追うと、すぐ横のブースで一か月前に入ったばかりの子がハンブラーをつけられているところだった。デジタル表示を見ると今日の射精回数は既に五回。確かこの子は一日六回と決めていたはずだ。

「あの牛さんはあと一回ミルクを出すんだけど、たぶん少しつらくなっちゃったんだろうね。腰が勝手に逃げちゃう子には、ああやってハンブラーっていう器具をつけて逃げられないようにするんだよ」

くくく

「淫乱なわんこもミルクをたっぷり出す牛さんも大好きだよ」

「アツ……」

新井と知り合うまでは牛になるプレイなんて想像したことがなかったのに、早く搾ってほしいと思ってしまう。扱いてくれなくていい。ホテルでしてくれたみたいに、本物の牛の搾乳のようにリズミカルに握ってほしい。そしてできれば次はペニスの下にバケツを置いておいてほしい。

アナルの周りまで剃毛を終えると、柔らかいタオルで股間全体を拭われた。なんだかそれが赤ん坊扱いみたいで、新たな扉を開かれたような気分になってしまう。

(エッチすぎる……)

新井にされることすべてがいやらしく思えてたまらない。今まで興奮材料になったことのないようなものでも性感のスパイスになってしまう。今家に一人だったら、確実にペニスをいじっていたのに。

「痒いところはない？」

「は、はい、大丈夫です」

陰部がきれいになると、新井がリングを掲げて見せた。それが思ったより小さくて、痛かったらどうしようと怖くなる。しかし新井はリングと陰囊を交互に見ると、満足げに頷いた。

「サイズは大丈夫そうだね」

「え……」

「——普通、急所に刃物をあてられていたら怖くて萎えそうなものだけど……こっちにつけてって言うてるのかな」勃起に笑いかけながら言う。「でもごめんね、これはこっち」

新井が春太の陰囊を手にとった。反射的に起こした上体を肘で支え、新井の手元を覗き込む。小さすぎると思ったリングは陰囊を一つずつ通り、驚くほど簡単に根本にはまった。痛みもなかったし、あっけない。

「どう？」

「はい……」

少しだけ縛られるような違和感はある。あとは



重み。小さなリング一つで、本当に新井のペットになれたのだと実感する。

(すごい……)

首輪のかわりに陰囊にリングをつけるなんて、すごくいやらしい。それに勃起をいじってもらえないことにも興奮した。

「痛みはないかな。少し歩いてみようか」

「はい」

抱っこでベッドから下ろされ、四つん這いになる。股間はスースーするし陰囊は重い。けれどカチツという音を立ててそこにリードを繋がれると、ペニスはさらに膨らんだ。

くくくく

アナルに硬いものが挿入された。とても細いものだ。けれどそこから温かいお湯が入ってくる。

(すごいっ……)

どんどん入ってくる。自分でするのはまったく違う。お腹が内側から温かくなってくる不思議な感覚。気持ちいい。でもあつという間に息が荒くなる。

ダメ、もう苦しいー。

「よし、じゃあ春太のトイレはここだよ」

「あ、は、はあ、は……」

そう言われるだろうと思っていたけれど、この

まま出したら部屋や体を汚してしまいそうだ。排尿ならできそうだけれどーどうか今だけはトイレを借りられないだろうか。ねだるように新井のすねに体をこすりつける。

「ん？ トイレはここだよ。上手にできるかな」

無理なのに。でももう出てしまいそうーどうやってしたらいいかわからない。便意が強くなってきた。アナルが出したがっている。でも汚してしまう。そんなことをしたら嫌われてしまう。うずくまって便意に耐える。

「……まだ子犬だから覚えられないかな」

新井の手が春太の肩を掴んだ。仰向けに寝かされ、パンパンのお腹が苦しくなる。

「うう……」

「お腹痛い？ すぐに楽になろうね」

突然腰を持ち上げられ、紙オムツで股間を包まれた。

「っ、」

「しばらくはオムツで過ごそうね。でもちゃんとトイレを覚えられるようにここでするんだよ」

「は、はあ、はあ……」

オムツをあてられる羞恥心はほとんど感じなかった。それより早く出したい。むしろオムツならペットシートにそのまま出すよりずっといい。

お座りの姿勢になり、目を閉じる。全身に新井の視線を感じると、音や臭いを知られてしまうこ

とが怖くなった。けれど犬ならそんなことは気にしない——犬が排便をするときのようにならずかに腰を上げた状態でアナルから少しづつ力を抜き、一気に出てしまわないように調整する。

「あつ……」

少し、出た。下にはペットシートが敷かれているので多少漏れてしまっても大丈夫。そう思うのに初めて来た新井の部屋、しかもリビングだと思ふと体が一瞬強張ってしまう。

「気持ちよさそうな顔。子犬でも上手に出せるね」

「は、あ、ア……」

春太は加減するのに必死なのに、新井には気持ちよさそうに見えるのか……本心が表情に表れているのだと思ったら興奮してしまった。排便の最中だというのにペニスが膨らみ上を向き始める。

「かわいい……」

新井が春太の頬を優しく撫でた。その感触に浸っていたのにお腹に入れられたお湯の量が多すぎてすぐに意識がそちらに戻ってしまう。

(ダメ、漏れちゃうっ……!)

くくく

カランとベルのような音が鳴った。見学に来たときや映像にはなかったけれど、これは来店の場合。四つん這いになって尻を通路に向けて突き出

す。

「こんにちは」背後で止まった足音。

新井が返す。

「こんにちは」

「まだ子牛だね」

「今日からです」

「じゃあ初ミルクかな」

「はい」

ドツドツドツドツと心臓が壊れそうなほど激しく動く。

「じゃあ一杯もらおうかな」

「ありがとうございます」

緊張でアナルが締まり、デイルドの存在を意識する。

(どうしよう……どうしたらいいんだっけ……)

何もする必要はないと言われたけれど、それは挨拶も含まれるのか。それとも挨拶は基本で、ミルク搾りに関しては何もしなくていいという意味だったのか。頭の中が疑問と不安でいっぱいになる。

「ハル、ミルク搾ってもらおうね」

「ハルっていうんだ」

「はい」

新井はリラックスさせるように背中を撫でてくれるけれど、体を支える春太の手は震えていた。

「じゃあハルくん。ミルクを出して——あ、搾り

方は？」

ついにくると思つて身構えたのに、拍子抜けしてしまふ。客に聞こえないよう、静かに深く息を吐く。

「乳搾りで大丈夫です」

そういうことは全部ブースの外に掲示してあるんじゃないか。それとも準備が間に合わなかったのだろうか。

「初なのにすごいね」

「ひあつ！」

油断していた。突然ペニスを握つて後方に引つ張られ、体が跳ねる。

「おや、驚かせてしまったみたいだ。悪かったね」

「不慣れなだけなのでお気になさらないでください」

「ありがとう」

新井の言葉の一つ一つが、新井の所有物になったことを改めて実感させる。

「お、膨らんできました。かわいいね」

「まだ子牛なので小さいんです。でもちゃんとミルクは出せますので」

「楽しみだ」

客がペニスの根元をきゅっと握つた。

く  
く  
く  
く

「あれ、春太くん？ お疲れ様」振り返ると、能代がいた。

「あ……能代、さん」

能代が頷きながらドアを開ける。

「どうぞー新井はどうしたの？」

「隣の部屋の方とお話ししてて」頭を下げながら中に入る。

「ああ、そっか。じゃあジュースでも飲んでるか」

短髪で体育会系の能代が白い歯を見せて笑った。さつきまでの不安が少し和らぐ。

「ありがとうございます」

渡されたのはミックスフルーツ。椅子を引いてくれたので、礼を言って能代の隣の席に座る。

「疲れてない？」

「ちよつと……でも大丈夫です」

「今は気が張ってるかもしれないけど、家に帰ったらガクンとくるから。帰ったら今日はもう外には出ずにゆっくり休むんだよ」

「はい」

なんだか新井みたいだ。電話でオナニーの許可をもらったときも、新井は通話を続けてくれて、射精するとお疲れ様と労ってくれた。

（やっぱり怪しくないよね）

詐欺のような会社だったら、きつとこんな立派な建物は持っていない。働いている牛だってたくさんいると言っていたし、恋愛関係以外の理由で

辞める人は少ないと言っていたから大丈夫——。

紙パックにストローを差す。よく冷えたそれは甘くて、知らず知らずのうちに体が糖分を求めていたことに気付いた。

「そういえば、お尻は痛くない？ 円座クッション持ってこようか？」

「え？」

「あいつの、でかいって噂だから」

能代がニツと笑った。しかし春太には何の話かわからない。首を傾げると、能代は声を上げて笑った。

「その反応は……やっぱりただの噂だったか」

「あの、何ですか？ 噂って」

「だからあいつの」能代が身を縮めた。内緒話をするように春太に顔を近づける。「——新井のちんこだよ。お尻、裂けなかった？」

「なんで新井さんの……え？」

春太が首を傾げると能代も同じように角度を変えろ。

「……え？ してないの？」

「何をですか？」

「種付け」

「たね……え、えっ?!」一瞬で頭に牛の交尾が思い浮かんだ。

「種付けなしでミルク出したの？」

「種付けって……その、こ、交尾のことですか……」

「…？」

「それ以外に何かあったっけ？」

「や…：その…：し、してないです」

どうやら恋人関係だと誤解されているようだ。春太としては嬉しい勘違いだけれど、新井にとつては迷惑だろう。

「へえ…：してないんだ」

「だってその…：」

出すのは母乳ではなく精液だ。搾乳とかミルク搾りなんて言い方をしたりもするけれど、本物のミルクではないので種付けは必要ない——あれ？乳牛ってメスだったらいつでも出るの…：？

考えたことがなかった。乳牛と言われるぐらいだから、いつでもミルクを出せる品種なのかもしれない。

「——その？」

「え？」

「いや、春太くんが何か言いかけたから」

「あ、や、えっと…：みんなしてるんですか？」

「どうかなあ。ほとんどしてると思うけど」

「え、でも乳牛…：ですよね？」

「うん。だから種付けするんじゃない。ミルクが出るように」

春太はその言葉に、頭を後ろからぶん殴られたような衝撃を感じた。



7万3千字。エロ多めです。  
よろしくお願いいたします！

ペットペットペッターサンプル

goneone (ワンわんわん)

2022 / 5 / 13

メール: goneonegoneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @goneone11